

「生活習慣はまじめ。糖尿病指標がもう少し下がるよう頑張りましょう」。糖尿病と高脂血症がある60代の女性の電子カルテ。記入したのは、千葉県九十九里町にある片貝薬局の薬剤師、富田勲さん（69）だ。投薬内容や、薬剤師として気付いた点を書き込んだ。

富田さんは「服薬指導は1人最低10分はかかる」。説明後は、患者に説明した内容のほか、生活環境などをカルテに入力した。

カルテを管理するのは、片貝薬局から車で・分ほど離れた同県東金市の県立東金病院。電子カルテは、東金病院を中心に、地域の診療所、薬局などを結んでおり、「わかしお医療ネットワーク」と呼ばれる。2001年度に始まった経済産業省のモデル事業だ。

主治医ら病院側は、患者の電子カルテに血糖値などの検査結果、処方する薬の種類や量を入力する。薬局では、患者が訪れれば、専用回線で結ばれたパソコン画面を開き、電子カルテを見ながら病気の症状、薬の飲み方を説明する。

オンラインデータを利用した服薬指導は全国初の試みという。

■□■

一般的な処方せんには、病名を記す必要はなく、薬剤師は薬を見て病名を推測する。一方、電子カルテに書き込まれた検査データや医師のコメントを見れば、薬剤師は、病名が分かり、薬の変更や投薬量の増減の理由もよく分かる。富田さんは「仮に抗がん剤が含まれた場合、電子カルテなら、がん告知の有無も確認可能」と活用法を説明した。

山武郡薬剤師会が3～4年ほど前に、電子カルテを利用する患者380人を対象にしたアンケートによると、電子カルテを使ったオンラインの服薬指導に満足する患者は7割を超える。

患者の糖尿病指標やコレステロール値を、オンラインの服薬指導と、通常の処方せんだけの服薬指導を比較すると、オンラインの方が、数値が改善する好結果を得られた。

電子カルテは、複数の医師や薬剤師が見ることができるため、投薬量や薬の種類の違いなどのミス防止にもつながる。

■□■

東金病院は、同じ医療圏内の診療所の医師らに専門的な医療技術を教えたり、医師のほか看護師、薬剤師ら向けの勉強会などを開いている。こうした取り組みで構築された人的ネットワークに、IT（情報技術）ネットワークを加え、地域の結びつきがさらに強まった。

同金病院の調査では、病院から診療所、診療所から病院への患者紹介率はともに大幅にアップした。入院患者の在院日数は平均22日から15日まで短縮でき、患者の症状が早く良くなっていることが裏付けられた。

わかしおネットワークの発案者で、東金病院の平井愛山院長（60）は「地域の限られた医師らを最大限活用するには、ITの活用が不可欠」と話す。

東金病院から車で30分ほど離れた松尾クリニック（山武市）は、糖尿病患者ら25人

の電子カルテを共有する。金子昇院長（55）は「病院で行う専門検査のデータを見ながら継続的な治療ができる。投薬の無駄もなくなる」と話した。